

# アメリカの学校における銃乱射事件の分析

越智 啓太

## Analysis of the School Shooting Incident in the United States.

Keita OCHI

### 要約

本論文では、アメリカの学校における銃乱射 (School Shooting) 事案をとりあげて、心理学的な観点から分析を加えた。まず、銃乱射事案の現状について概観し、このような事件が増加する傾向にあることを示した。次に、FBIやシークレットサービスの報告書をもとに、その犯人の特徴、犯行パターンについて概観し、その犯人のプロファイリング (profiling) の可能性について考察した。第3に、銃乱射事件の原因についての議論のうち、テレビやビデオゲームの影響、民主的なしつけ、銃の入手容易性についてとりあげ、それらの問題の現状について分析した。その結果、現段階では、これらの要因が銃乱射の原因であると断定するのは困難であるということが示された。そして、最後に、このタイプの事件が日本で発生する可能性について検討した。

キーワード：銃乱射、学校内暴力、大量殺人、プロファイリング、少年非行、銃規制

### 1. 銃乱射事件の概念

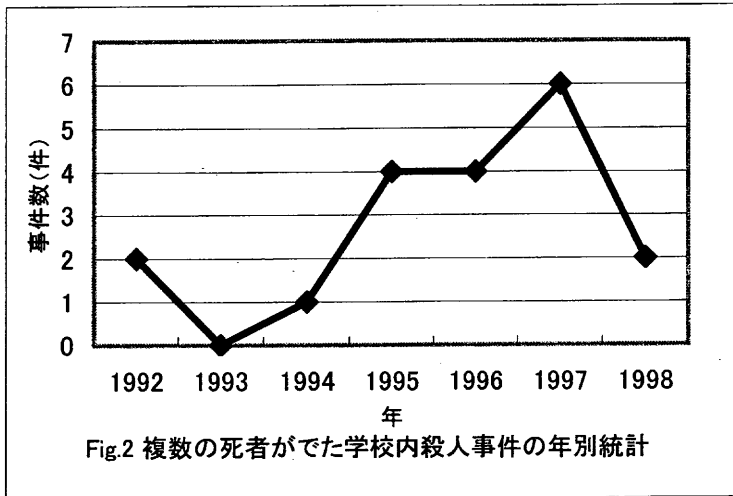
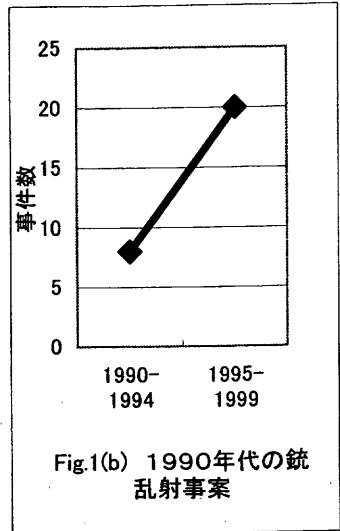
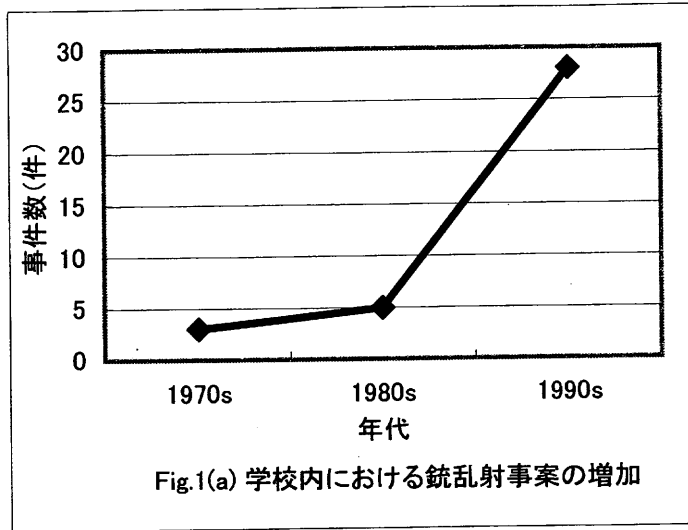
近年、アメリカの中学校や高等学校等で、在学中の生徒や卒業生が、同級生や教師を銃で撃つといった事案が、しばしば報道される。これは、英語ではスクールシューティング (school shooting) と呼ばれているが、日本語では、マスコミ報道でしばしば使用される、「(学校における) 銃乱射」事案と呼ぶのが適当であろう。

最近では、1999年の4月20日に、コロラド州のコロンバイン高校において、当時17歳と18歳のふたりの少年が学内でこのタイプの事件を起こし、警官隊に包囲されて自殺するまでの間に12人の生徒と1人の教師を射殺した事件や、1998年の3月にオレゴン州の15歳の少年が父親に買ってもらった銃で両親を射殺した後、高校に行き、カフェテリアでセミオートマチックライフルを乱射し、24人を死傷させた事件などが有名である。

さて、銃乱射事案が発生すると、「なぜこのような事件が起きたのか」、「このような事件はどうすれば防げるのか」等の問題について、TVや新聞、雑誌などで、多くの議論がなされる。ところが、この現象自体新しく、分析に耐えるだけの十分なケースが存在しないこともあって、このような議論は、場当たりのものになりがちである。実際、この現象についての研究や、その研究の現状を展望できる資料は極めて少ない(とりわけ本邦においては、ほとんどない)。そこで、本論文では、銃乱射現象について、従来、なされてきた研究を展望し、今後の課題について検討してみることにする。

### 2. 銃乱射事件の動向

まず、この種の事件の全体的な動向から見よう。DeRosier (2001) は、全米での銃乱射事案の推移をまとめているが、それをもとに年代ごとの銃乱射事件の動向を図にしたものを Fig. 1(a)、(b)



に示す。銃乱射事件自体についての公的な統計は、存在しないと思われるが、2000年の全米学校安全年報(Annual report on school safety)による複数の被害者を出した学校内殺人件数の中には、銃乱射事案が多く含まれていると考えられるので、この統計が、それに比較的近いものだと思う。

この事件件数の年別の統計を Fig. 2 に示す。これらの図からも明らかなように、このような事案は年々増加する傾向にあることが読みとれる。

興味深いのは、アメリカにおける犯罪件数や学校における暴力の件数は、1992年以降減少してい

るという事実である(NSSC, 2001)。また、少年が加害者や被害者になる割合も同様に1992～1993年を境にして減少している(Holmes and Holmes, 2001)。銃乱射事案は、このような全体的な傾向にもかかわらず増加しているのである。

### 3. 銃乱射犯人の典型的犯人像と犯行パターン

次に、このような銃乱射事件は、どのような犯人によって、どのような犯行形態で引き起こされているのかについて検討してみよう。これらの点について、客観的な分析を提供している研究とし

ては、次の3つのものがある。

第1の研究は、Holmes and Holmes (2001) である。彼等は、1996年以降の何件かの銃乱射事案を分析し、そこに共通して現れている犯人の属性を分析し、犯人像の「ワーキングプロファイル」を作成している。第2の研究は、アメリカのシークレットサービス (Secret Service) の国家脅威アセスメントセンター (National Threat Assessment Center : NTAC) による分析である。NTACは、1974年以降の37件の銃乱射事案、41名の犯人について、スタッフ心理学者のB.Vossekuil, M. Reddyと、R. Feinによって分析を行ないその特徴をリストアップしている。第3の研究は、アメリカ連邦捜査局 (Federal Bureau of Investigation : FBI) の暴力犯罪分析センター (National Center for the Analysis of Violent Crimes : NCAVC) が中心となって、1999年の7月に多くの専門家を集めて行われたリースベルグ銃乱射事案シンポジウム (Leesberg Symposium on School Shooting) による分析である。ここでは、近年発生した18ケースの銃乱射事案 (5ケースが中学校、13ケースが高等学校) について行動科学的な観点から分析が行われた。スタッフには、著名な暴力犯罪研究者のDietzや、バージニア大学の犯罪心理学者のCornell、同じくバージニア大学の臨床心理学者Saathoffをはじめジャーナリストや精神分析学者、学校心理学者、FBI捜査官が参加している。この分析では、銃乱射事案の脅威の度合いについて、学生のパーソナリティ、家族のダイナミクス、学校のダイナミクスとそこにおける学生の位置づけ、社会のダイナミクスの4つの側面から分析がなされている。

これらの文献をみても、銃乱射事案は、多様な形態を示すのは確かであるものの、まったく予想外の犯人が、予想外のパターンで犯行を行うと

いった形なのではなく、ある程度は典型的な犯人と犯行パターンで行われるものであることがわかる。では、これらの分析によって示された銃乱射事案の典型的なプロファイルはどのようなものであろうか。

## (1) 犯罪者像

まず、これらの研究から示される犯人の特性について列挙してみよう。

- ① 犯人の多くは白人の男性である。現在のところ女性の犯人は存在しない (ただし、シークレットサービスの分析に使用されたケースのほぼ1/4の犯人は白人ではない)。
- ② 犯人の年齢は被害者と同年代 (高校での乱射では高校生、中学の乱射では中学生) である。
- ③ 多くの場合、犯人はその学校の生徒か卒業生である。
- ④ 犯人の学業成績は多様である。優等生であることから劣等生であることまである。
- ⑤ 犯人は孤立し、変わり者だと思われる個人か、そのように思われているグループの一員である。
- ⑥ 犯人の多くは、インターネットやコンピュータゲームを趣味としているか、それらに日常生活を長時間あてている。家族はこれらのプログラムの視聴に制限を加えていないケースが多い。彼らはしばしばチャットやBBSに、攻撃的なメッセージを書き込んでいる。コンピュータゲームでは、シューティング系ゲームを好む。
- ⑦ 犯人は暴力的な映画についても興味を持っている場合が多い。「バスケットボールダイヤーズ」と「ナチュラルボーンキラーズ」などが彼らにとって人気がある。
- ⑧ 犯人は事件以前から銃や爆弾に興味を持っている場合が多い。

⑨ 従来、校内暴力や構内殺人事件は、ギャングといわれている非行グループやその一員によって引き起こされることが多かった。ところが、銃乱射事件は、このようなグループによって引き起こされるのではない（ギャングなどの名前がついたグループの一員によって引き起こされる場合もあるが、このグループの形態は、従来の非行グループとは質的に異なる）。

⑩ 親からのネグレクトや虐待などの悪い家庭環境、悪い生育環境、などの要因は銃乱射と関係がないようである。銃乱射犯人の中には悪い環境で育ったものもよい環境で育ったものもいる（むしろ中流家庭で育ったケースに多いという指摘もある）。

⑪ コントロールできない怒りやうつ、暴力的なものへの親和性（死や殺人についての詩や日記、いたずら書きなどをする）、動物の虐待などの特性をもつ犯人が多い。

⑫ フラストレーションに対する耐性が弱く、それに対するコーピングスキルも未熟であるケースが多い。

⑬ 自己中心的でナルチシズムの傾向があり、自己について万能感をもっている。自分や自分の集団以外の人間について、低く見る傾向がある、または、他人から注目されることを求める傾向がある犯人が多い。

## (2) 犯行現場

犯人が以上のような比較的典型的なパターンをもっているのと同様に犯行形態についても比較的典型的なシナリオが存在する。

① 犯人は、犯行時に逮捕されるか、自殺する。

② 多くのケースでは銃の乱射は警察が来る前に終了する。半数の事件で、20分以内、1件（コロンバインケース）をのぞく残りすべてのケー

スで3時間以内に終結している

③ 犯人は殺害する対象として「復讐」しようとする対象のグループやメンバーを考えており、その対象をねらう。狙う対象が個人であるケースは少ない。しかし、実際には当初想定された対象でなく、その場に単に居合わせた人が巻き添えて犠牲になる。

④ 多くの銃乱射事案は、田舎か郊外の学校で発生し、都会の学校では発生しない。都会の学校で、銃の乱射が起きる場合、それは、単に特定の人物を狙った殺人である。

## (3) 犯行の動機と計画性

同様に、犯行の計画性等についても、共通した特徴がみられる。具体的には以下のような特徴である。

① 銃乱射犯人自らの供述をみると、犯人の動機は何らかのグループ（たとえば、スポーツの得意な生徒や優等生、人種的マイノリティ等）に対する攻撃や復讐であると証言される場合が多い。逮捕された犯人のうち、約半数が明示的に「復讐」を動機にあげる。

② 全体の3/4の犯人が犯行時に何らかの不平不満や苦情について口にする。犯人は日頃から、自らにふりかかった不公平や不正について過度に敏感であり、そのような事実を「ため込む」性質がある（FBIの報告書では“injustice collector”と命名されている）。

③ 犯行は突発的・衝動的であるよりも計画的である。75%以上の犯人が犯行を事前に計画しており、半分以上の犯人が犯行を2日以上前から計画していた。また、犯行のアイデアについては、半分以上が2週間以上前から持っていたと証言する。

④ 犯人は事前に犯行プランやアイディアを人に

話すことが多い。3/4以上のケースで犯人以外のほかの子供が、事前に事件のことを知っている。ある場合には、プランの細かな内容まで知っているし、ある場合には、何か「悪い」あるいは「大きな」ことが起きるというレベルで話を聞いている。

- ⑤ 犯人は、犯行以前に自分の敵である集団を殺害するといったファンタジーを繰り返している。犯行は、このファンタジーの実行である（この点に関しては、Moeller, 2001より）。
- ⑥ 銃乱射事案を引き起こす直前にはひとりで多くの時間を過ごしたりまた、犯人が複数のケースでは、銃乱射をする前に犯人同士で、多くの時間を過ごす。
- ⑦ 多くの犯人は犯行以前に銃を持っているか、そこにアクセス出来る環境にいる

#### 4. 銃乱射事件犯人のプロファイリング可能性

前節では、いくつかの研究によって、銃乱射犯人の犯人像や犯行の典型的なパターンについてある程度明らかになってきたことを示した。では、このようなリストは、いわゆるプロファイリングに有効に活用できるのであろうか。

プロファイリングとは、異常な犯罪について、その犯行パターンを分析し、その犯行を行った犯人像について経験的なルールによって推測する技術である。主として米国連邦捜査局（FBI）によって、連続殺人（Ressler, Burgess, and Douglas, 1988）、放火（Holmes and Holmes, 1996）、強姦（Hezelwood, 1989）、放火（Rider, 1980a, 1980b）などについて検討されてきた。

銃乱射犯人のプロファイリングについて考える場合、まず、その使用方法が従来のプロファイリングと異なっていることを把握しておくことが必要である。従来のプロファイリングは、ある事件

が発生し、その犯人像が全く不明な状況に、そのおおまかなタイプを示すために用いられるのがふつうである。しかし、学校での銃乱射事案では、犯人のほとんどすべてが、事件直後に拘束されるか自殺しているし、また、いままで、犯人が、自分が誰であるのかを隠そうとしたケースは存在しないので、このような用途で用いるケースはないと思われる。銃乱射事案にこの手法を利用するとすれば、それは、事前に銃乱射しそうな生徒を抽出できるか、といった問題になるであろう。

では、銃乱射犯人の予測に上記のような犯人像リストは、使用できるであろうか。上記リストのうち、犯人像の部分を見てみると、このようなリストから、プロファイリングを行ない、「あぶない生徒」をピックアップするのはたいへん危険であるということがわかる。なぜなら、おそらく、このような特徴リストにあてはまる生徒は、各学校ごとに相当数いると思われるからである。しかし、実際、銃乱射に至る生徒はその中でもきわめて低い割合しかいない。そのため、このような生徒を学校や警察が、マークするようなことがあれば、フォールスポジティブ、つまり、誤って犯人としてしまう可能性が非常に多くなってしまうのである。これでは、人権侵害になりこそすれ、有効な犯罪対策にはならないであろう。

実は、前節であげたFBIの報告書も、シークレットサービスの報告書も「このリストを犯人を事前に捜し出す用途には用いることができない」「危険な生徒を事前にチェックするリストとして使用してはならない」と強く主張している。おそらくこれも同様なリストの濫用を危惧したものであろう。

したがって、銃乱射事件が発生すると、FBIのプロファイリングは当たったか、といった論議が必ずおきてくるが、このような論議は、大きな誤

りと危険性を含んでいる。とくに心理学者はこのような、誤った議論を決してすべきではないだろう。

## 5. 銃乱射の原因をめぐる議論の現状

銃乱射事件は、ショッキングな事件であり、また、被害も大きいため、その原因を明らかにし、防止策を考えていくことが非常になってくる。しかし、現在のところ、銃乱射事件の原因については明確な仮説は提案されていないし、実証的な研究も少ない。

さかんなのは、事件について、専門家と称する人物がマスコミに登場して、持論を述べるということである（これは我が国においても同様である）。このような専門家が言及することが多い原因には、①テレビやゲームなどを原因とするもの、②教育制度に原因を求めるもの、③銃の手に入りやすさに原因を求めるもの、がある（これ以外に、いじめなどに原因を求めるもの（Gillespie, 1999）、前頭葉の未発達に原因を求めるもの（Weinberger, 2001）などがある）。では、このような仮説には実証的な根拠があるのであろうか。この点について検討してみよう。

### (1) テレビやゲームの暴力は犯行の原因であるか

この説の根拠になっているのは、銃乱射犯人の多くが、シューティングゲームを行っていたこと、彼らが夢中になっていたシューティングゲームがまさに多くのターゲットが存在するフィールドに突入し、自分が殺されないように多くのターゲットを破壊するという銃乱射事案に類似したシナリオであること、あるいは、銃乱射の犯人の少年が逮捕後に、シューティングゲームなどの影響によってこれらの事件を起こしたのだということなどである。とくに「暴力ゲームのやりすぎでゲームと

現実の区別がつかなくなった」といった理由づけは、評論家ばかりでなく、心理学者によってもしばしば言及される「人気のある」見解である。

たしかに、FBIなどの報告でも暴力映像と犯行との関連については指摘されている。ただし、現実問題として銃乱射など引き起こさないほかの多くの学生においても、このようなゲームに「はまっている」子供は多く、このようなゲームを行うことが、銃乱射の可能性を引き上げるのか、それとも引き下げるのかについては、実証的に研究しない限りわからないはずである。そして、現在のところ、残念ながらこのような研究は存在していない。また、もし、このような映像やゲームの氾濫が人を暴力行動に駆り立てているとするならば、銃乱射以外の校内暴力が減少していることを説明することはできない。

さらに暴力的なテレビの視聴や暴力ゲームと暴力行動の関連については、いままで多くの研究がなされている（Freedman, 2002）が、それらの研究においても、暴力映像や暴力ゲームが攻撃行動にどのような影響を与えるのかについては明らかになっていない。これらの関係についていままで行われた実験室研究、調査研究、パネル研究を統合したメタ分析研究が複数行われているが、いずれの研究でも暴力シーンと暴力行為の関係についての効果量はそれほど高くないことが示されている（Hearold, 1986; Wood et al. 1991; Paik and Comstock, 1994; Hogben, 1998）。マスコミの暴力描写が、銃乱射の原因であると主張する論者はこれらの間の因果関係は証明されていると述べる人が多い（Keegan, 1999）がこれは誤りである。

これらのことから考えると、銃乱射の原因として暴力映像やゲームをあげるのにはまだ、慎重になるべきであろう。

しかし、銃乱射を引き起こす一連の因果関係の流れの中で、マスコミ情報がまったく役割を果たしていないというのも、考えにくい、たとえば、銃乱射事案に関しては、いわゆる「コピーキャット」現象、すなわち、一つの事案が生じるとそれと類似した「まね」事案が続出するということが指摘されているが、これは先行する銃乱射事案の報道（暴力映像）が何らかの影響を及ぼしたひとつの証拠といえる。また、実際の銃乱射時における犯人の行動や手口も、先行する事件の報道の影響を受けて、変化していることも確かであり、行動レパトリの学習などの部分も含めればこれらの情報がまったく影響を及ぼしていないというのも考えにくいだろう。ただし、ゲームや映画が、これらの犯罪のどの側面にどの程度影響しているのかについては、今後も引き続いて検討していかなければならない。

## (2) 民主的なしつけが銃乱射事案の原因であるか

最近、学校犯罪の原因として、指摘されることの多いのが、教育に原因を求める説である。銃乱射事案についてもやはりこのような見解は存在する。この説では、アメリカの自由主義的で民主的な教育が銃乱射の原因の一つであるとする(Dougherty, 1999; Rosemond, 2000)。

たとえば、最近では、このような説を唱えるRosemondの著書がベストセラーになっている。彼によれば、子供の教育においては、善悪のけじめをつける規範的な教育が重要であり、そのためには、権威や威厳を持った大人が、ある程度の体罰を含む方法で、規範を教え込むといった教育が不可欠である。ところが、近年の教育の多くは、子供が悪いことをしても、言葉でやわらかく説得するだけで強く叱らないし、両親や父母の威厳はきわめて低下し、むしろ友人と同様な関係である。

このような状況下では、そもそも規範を学習することはできない。規範を学習しなかったことは非行や犯罪、そして銃乱射犯罪に手を染めるようになっていく、というのである。

このような主張はいくつかの非常に重要な論点を含んでいると思われるが、現在のところ、この主張を裏付ける実証的なデータは非常に少ない。それどころか、銃乱射のケースを細かく見てみると、むしろ、銃乱射犯人の家庭環境の多様性が目につくが、これは銃乱射犯人の家庭はみな民主的な教育方針をとっているという説にとっては障害となるものであろう。なぜなら、現実には、アメリカのすべての階層にこのような教育方針が等しくいきわたっているとは考えにくいからである。また、もし、このような主張が正しいとすれば、銃乱射ばかりでなく、少年犯罪や少年非行全般について、増加傾向が示されるはずであるが、さきにも述べたように、校内暴力の実数や犯罪の実数はむしろ減少しており、この事実は、この説に反しているものといわざるを得ない。

このようなことから考えると民主的な教育方針が銃乱射の原因であるという主張は、興味深い指摘ではあるのは確かだが、受け入れがたいようにも思われる。

## (3) 銃の入手容易性が銃乱射事案を引き起こしたのか

3番目の問題として、銃へのアクセス容易性の問題がある。銃乱射事案は、アメリカにおけるいわゆる「銃規制問題」と絡めて議論される場合が多い。

この点については、銃乱射事案の原因は、銃に対する規制が緩いために、犯人が容易に銃を手に入れることが出来ることにありと指摘する論者(Gahr, 2001; Coffy, 2000)と、銃規制は、銃乱

射事案と全く関係ないと主張する論者 (Kopel and Armstrong, 2001; Eisen, 2000) にわかれている。前者の主張の根拠としては、都会よりも田舎で、銃乱射事案が多いのは、田舎部のほうが、銃保有者率が多いからであるなどがあげられている。しかし、この点については慎重に議論することが必要である。実際、銃乱射事案以外の銃による犯罪は都会の方が多くからである (Holmes and Holmes, 2001)。また、後者の主張としては、銃規制が必ずしも犯罪を減少させていないこと (Lott, 1998)、犯罪に用いられる銃の多くは不法なもので、銃規制法を制定しても事態に影響はないことなどがあげられている。しかしこのような見解についても銃乱射事件で用いられる銃の多くは両親が合法的に所有する銃であるなどの問題点もある。

銃乱射事案の発生を規定する要因の一つとして、(銃なくしてこの犯罪を起こすことはできないので) 銃入手の容易性の要因が影響しているのは確実だと考えられるが、それが事件の発生にとって、どの程度影響しているのかについては、未だ明らかになっていない。つまり、それが決定的な要因なのか、単に事件の生起頻度を若干上げる程度のものなのかについては明らかになっていない。この点についても実証的研究がない現在では、推測的なことしかいえない。

## 6. 銃乱射事件が日本で起きる可能性

最後に、考えておく必要があるのは、本邦でのこのような犯罪の生起可能性の問題である。

ここで、注目しておく必要があるのは、澤田幸弘、石井聰互監督による「高校大パニック」という映画についてである。1978年に作られたこの映画では、高校生が猟銃で教師を殺害し、教室に立てこもり、警官隊と撃ち合い、その中で生徒が巻

き込まれて死亡したりけがを負うといった「銃乱射」事案が描かれている。

重要なのは、本作品自体は、商業映画であるが、その元になったのは、石井聰互が日本大学芸術学部の学生時代、19歳の時に制作した自主映画だということである。これは、銃乱射の当事者になる可能性のある世代が、すでにこの年代の日本でも、同様の事件についてのイメージを持っていたことを示している。ただし、この映画では、犯人の攻撃対象はあくまで、教師であり、また、それも管理教育や受験戦争の象徴としての教師である。そのような点では、この映画で描かれている犯罪は、アメリカ型の銃乱射事案と同じというよりはむしろ、教師に対する殺人がたまたま学校で行われた事案であると考えたほうがよいのかもしれない。

しかしながら、本邦でも、生徒が刃物で教師や友人を刺す事件は起きており、もし、このようなケースで犯人が銃を持っていれば、アメリカの銃乱射事案と類似の事件が生じる可能性は大きいと思われる。単に銃の入手が容易でないという理由が、この種の犯罪の日本での発生を抑えているにすぎないという可能性も否定できないため、今後、十分注意して、状況を見守っていく必要があるだろう。

## 7. 銃乱射研究の展望

以上、銃乱射事案をめぐる事件の現状、実証研究の結果とプロファイリングの可能性、銃乱射の原因についての議論の現状について概観してみた。

銃乱射事案については近年、ようやく研究可能な状況になってきた。それは、残念なことであるが、十分な事例が集まってきて、FBIやシークレットサービスの研究に見られるようにその典型的な犯人像や犯行パターンがはっきりしはじめたからである。ただ、その生起メカニズムやその特性、プ

ロファイリング可能性をはじめとした、さまざまな論点についての実証的な研究は(評論家の事後的で根拠の明確でない議論は多いものの)、現在のところそれほど多くない。今後は、これらの点について、しっかりとした方法論で検討していくことが必要であろう。

## 文献

- Coffey, K. 2000 One year after Columbine: reflections on the Million Mom March. *America*, June 17
- Daniels, L. 1999 Shooters didn't fit profile, study says. *The Oregonian*, September 28
- DeRosier, M. E., 2001 School Shooters: Who are They? <http://www.3cprogram.com/whoareshooters.html>
- Dority, B. 1999 The Columbine Tragedy: Countering the Hysteria. *The Humanist*, July
- Dougherty, J. P. 1999 Assessing blame. *The Wanderer*, August 26
- Egendorf, L. K. 2002 *School Shootings*. CA: Greenheaven Press
- Eisen, J. 2000 Ambush! Exploiting the tragedy at Columbine. *Guns*, January
- FBI (Federal Bureau of Investigation) 2001 *The School Shooters: a threat assessment perspective*. FBI
- Freedman, J. L. 2002 *Media violence and its effect on aggression*. University of Toronto Press.
- Gahr, E. 2001 Fellow conservatives: our position is hypocritical. *The Washinton Post*, April 22
- Gillespie, N. 1999 Schools of alienation. *Reason*, July.
- Hazelwood, R. R. and Warren, J. 1989 The serial rapist: his characteristics and victims. *FBI Law Enforcement Bulletin*, Num 1, 10-17.
- Hearold, S. 1986 A Synthesis of 1043 effects of television on social behavior. In G. Comsrock (Ed.), *Public Communication and Behavior*. Vol.1 (pp.65-133.) CA: Academic Press.
- Hogben, M. 1998 Factors moderating the effect of television aggression on viewer behavior. *Communication Research*, 25, 220-247.
- Holmes, R. M. and Holmes, S. T. 1996 *Profiling violent crimes*. Thousant Oaks: Sage
- Holmes, R. M. and Holmes, S. T. 2002 *Profiling violent crimes(2nd)*. Thousant Oaks: Sage
- Holmes, R. M. and Holmes, S. T. 2001 *Murder in America (2nd)* Thousand Oaks: Sage
- 飯塚真紀子 2000 そしてぼくは銃口をむけた 草思社
- 石井聰互 1976 高校大パニック (8ミリ映画) 自主制作
- Kopel, D. and Armstrong, A. 2001 Sure, blame the gun. *National Review Online*, March 9, <http://www.nationalreview.com>
- Keegan, P. 1999 Culture Quake. *Mother Jones*, November.
- Levine, S. 1999 Who is to blame for terror in our schools? *San Diego Union-Tribune*, April 22
- Lott, J. 1998 *More guns, less crime*. Chicago: University of Chicago Press.
- Moeller, T. G. 2001 *Youth aggression and violence*. NJ: Lawrence Erlbaum Association
- Paik, H. and Comstock, G. 1994 The effects of television violence on antisocial behavior: a meta-analysis. *Communication Research*, 21, 516-546.
- Ressler, R. K., Burgess, A. W., and Douglas, J. E. 1988 *Sexual Homicide: Patterns and Motives*. MA: Lexington Books.
- Rider, A. O. 1980a The Firesetter: a psychological profile (Part 1) *FBI Law Enforcement Bulletin*, Num 6, 6-13.
- Rider, A. O. 1980b The Firesetter: a psychological profile (Part 2) *FBI Law Enforcement Bulletin*, Num 7, 6-17.
- Rosemond, J. K. 2000 *Raising a nonviolent child*. Andrew McMeel Publishing
- 澤田幸弘・石井聰互 1978 高校大パニック(映画) 日活株式会社
- USSS (U.S. Secret Service) National Threat Assessment Center 2000 *An interim report on the prevention of targeted violence in schools*. USSS
- NSSC (National School Safety Center) 2000 Annual reports on school safety CA: NSSC
- Weinberger, D. R. 2001 A brain too young for good judgement. *The New York Times*, March 10
- Wood, W., Wong, F. Y., and Chachere, J. G. 1991 Effects of media violence on viewers' aggression in unconstrained social interaction. *Psychological Bulletin*, 109, 371-383.

### Abstract

In the present paper, the issue of school shootings in the USA was explored and psychologically analysed. First, surveying the current situation of school shooting incidences, it was showed that such cases had been steadily increasing. Secondly, surveying the offender characteristics and the patterns of criminal behaviors on the basis of reports of the FBI and the Secret Service, the potentialities of profiling were discussed. Thirdly, reviewing the research on the causes of school shooting, especially the influence of TV programs and video games, democratic discipline, and the availability of guns, the existing circumstances were discussed. As the results, it was supposed to be difficult that school shootings were caused by such possible factors mentioned above. Finally, the possibilities of school shootings in Japan were discussed.

**Key words :** school shootings, school violence, mass murder, profiling, juvenile delinquency,  
gun control